

# 現場のわりきれなさ、 (あまり) 現場にいない言葉たくみな人 大阪・釜ヶ崎で喫茶店のふりをするアート NPO ココルームを 研究者はどのように語るか 上田 假奈代\*

Kanayo UEDA

We Who Work in the Field Everyday Are Not Good with Words:  
Researchers Who Are Good with Words Don't Often (Need to) Come to the Field

この文章を書く理由は、近年「アートとジェントリフィケーション」ということばのうちに、地域で行われるアート活動に対しての批判がこめられるようになったことに端を発する。

一般的に、ジェントリフィケーションとは、「浄化」と言われる。治安が悪い、あるいは地価の安い地域を浄化し、地価をあげることで、もともとそこにいた貧乏人が住めなくなる、というイメージだろうか。浄化は、再開発が資本や行政によって進められることもあれば、少しづつ住人が移り変わり気がつけば街が変わっていた、ということもある。そして、アートがジェントリフィケーションに関与するという意見がある。

確かに、地価をあげるために、あるいは地域の治安のために、アートに関与する事例もあるし、無自覚に関わってしまった事例も聞く。

ここで考えたいのは、「アートとジェントリフィケーション」の関係を一方的なまなざしでもみることもよりも、複雑な状況のなか、研究のことばと現場との関わり方への視座を得ることだ。

現場に暮らし、アートNPO<sup>1)</sup>を運営するわたしがこれまでの18年の活動において、研究者やメディア、政策策定に関わる人たちの言説が、気づきや支えになる一方、現場にとっては的外れであったり、ときに現場を踏みにじるものであることについて、考えたいからである。

なぜ、現場はことばに表すことができないのか。苦手なのか。

そして、外からやってきた研究者は、現場とどのようにつきあい距離をとり、ことばにしていくのか。どうすればこの両者のことばの溝は架橋できるの

か。どうすれば対話への道筋はつくれるのか。

## 1. 「アートとジェントリフィケーション」の関わり

近年、この関係が取りざたされるようになったのは、1990年代以降、アートの発表や活動の場が美術館や劇場だけでなく、地域で行われるようになったからだ。「アートプロジェクト」と呼ばれる。

アートプロジェクトとは、「作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入りこんで、個別の社会的事象と関わりながら展開される。(略) こうした活動は、美術家たちが廃校・廃屋などで行う展覧会や拠点づくり、野外/まちなかの作品展示や公演を行う芸術祭、コミュニティの課題を解決するための社会実験的な活動など、幅広い形で現れるものを指すようになりつつある。」(熊倉 2014:9)

担い手となる主体もアーティスト、アートプロデューサー、アートNPO、大学、行政など、さまざまだ。また協働相手や関わる人々も必要だ。町会、大学、企業、まちづくり会社、行政など、多岐に渡る。そして、そこに助成金や資金をだす国、自治体、財団、企業などもある。小さな規模から大規模なものまでが、ざっくりと「アートプロジェクト」として存在する。

さまざまな立場が混在していることから、一括りにするのは難しいのは承知いただけるだろう。

この中でも、地域の課題解決をめざすアートプロジェクト、社会関与型芸術も存在する。結果、経済

\* 詩人、NPO 法人こえとことばとこころの部屋 (ココルーム) 代表理事、大阪市立大学 都市研究プラザ特別研究員

化活性を好む都市計画者の思惑のとおり、街を浄化し、安全安心な街へ変えてゆく。それは地価をあげるための手助けとなり、ジェントリフィケーションへの加担と捉えられる。

西成区の釜ヶ崎で行われるアートプロジェクトへの批判を以下に紹介する。

「西成特区構想におけるアートプロジェクトを『行政の公的支援のもとで行われるものである』として取り上げたとき、1、アートが否定する都市の風景 2、アートプロジェクトは行政の都市開発と連携することで『貧乏人』は追い出され『普通の町』へと作り変えていく」(中村 2011:70)

「アートによる街づくりは、いわゆる一般社会の健康的で文化的な生活/人間へと更生させ、経済活動に組み込もうとしているということだ。(略) 行政にとって推奨される逸脱のない範囲での『自立』枠組みであり、これまでのケアの領域やアートの表現の幅さえ狭めているのだ。この地でなされてきた様々な実力行動、社会運動を見れば、怒り、暴力、野次、投石が街の歴史を作ってきたにもかかわらず、そうしたエネルギーの噴出をアートを使ってなるべくゆるく、温かく、穏やかなものへと封じ込めようとするのだ。その線においてアートは行政にとって都合よく利用され、取り込まれてしまうのだ。」(前掲書:74-75)

さらに、このテキストを援用して、

「そこで、問題になったのは、こういう『ごちゃごちゃ』をなにか正すべきカオスとしかみない発想が、どれほど差別的なまなざしを内包しているのか、そしてそれが、どれほど大きな社会構造と結びついているのか、ということでした。まさに『社会病理学的』視点が露骨にあらわれているわけですが、ここでもそれがいえます。このような『ごちゃごちゃ』が奪われることに対して反発する感性は、なにか重大なことを表明しているのです。」(酒井 2019)

この言説によると、アートの取り組みは「ごちゃごちゃ」を排除する差別的なまなざしでとらえているということになる。「ごちゃごちゃ」というものが、何をさしているのかは感性によって異なると思うが、筆者が携わるココルームに数時間滞在してもらえばすぐにわかると思う。「ごちゃごちゃ」している。ややこしい人も来る。お金を払えない貧乏な人がふ

らりと喫茶店(ココルーム)に来る。彼らと話したり、そのことで時にはトラブルもあることも日常としてとらえ、ココルームはその場を開いている。一見の人とはその時だけの関係だが、何度も訪れてくれる人には時間をかけて関係を持つ。支援者でもないの、せいぜい近所の人という関係である。だから一方的な関係でもない。スタッフも含め、そこにいる者が励まされたり、助けられていることもたくさんある。それに、差別的なまなざしを持つ者が、この地で場を開き仕事をつづけることは容易ではない。もちろん相性もあるから、ココルームが苦手、嫌いという人はいるだろう。そういう人がココルームを非難するのはわかる。研究者である酒井は「社会病理学的」視点に結びつけて、現場をどのようにまなざしているのであろうか。

中村が文中で批判しているラッパーについても同様だが、現場にいる者は、さまざまな日々の出来事や人々の関わりをいちいち言語化して、わざわざ伝えたりしない。エッジの効いたこの街に暮らし、働くということは、人との関わり合いは暗黙知になってしまいがちだ。この現場のあたりまえの感覚を上記研究者たちは想像することはないのだろうか。

さらに、英語で書かれた文章もある。以下は日本語訳。

「ココルームが、大阪市南部において個人的な信頼関係や協力関係を原動力に運営されていることや、ココルームの代表者が今日の市場でうまく渡り合える人物であることは疑いようがない。同時に、その『社会的転回』は、施政者の新自由主義的なロジックへと回収されていく、途方もない『創造性』の集積によって生まれる文化資源として位置づけられている。NPO法人団体が、住民たちに社会的な救いを差し伸べる一方で、彼らは必ずしも直接的には都市政策を変えたり、立ち向かったりすることはせず、代わりに『公共の表現』という答えのない文脈を作りだしている。こうしたアプローチの危険なところは、草の根的なアートプロジェクトが、地域の『声』の対話を生み出すことで、文化資源の自由なネットワークを作り上げていて、危機的な地域を元気づけようとする点にある。パブリックアートやパフォーマンスへの支援は、新たに経済活性化の展開を組立てるために下支えするものを作り、公式ではない文化の歴史に対して、地域の再ブランド化に結びつけられることで修正がかけられていく。『社会関与型芸術』に対する不安定なインフラストラクチャーは、一時的な『創造性』の地平を作り出し、たえず都市を新たに現れた

企業家らによる再活性化の最先端を作り出すように働きかけている。」(Novak 2019:101-102)

ここに紹介した3つのテキストは、ココルームをアートプロジェクトにとらえ、行政の関与、行政に取り込まれている、あるいは新たな代表者らによる地域の再活性化に関わっているととらえている。

キーワードは「行政」、「再活性化」、「新自由主義」だろうか。

まず「行政」については、ココルームの活動に行政は関与していない。補助金などはない。その上でもし、ココルームの代表理事である筆者が行政の主催するエリアマネジメント会議の委員として出席することを、行政に取り込まれるととらえているのだろうか。だとすれば、また違う文脈をみてほしいところだ。実際この会議には男性が多く、ジェンダーバランスも気になる。この地域で暮らし働いている者として、女性も会議に出て意見を伝えることも大事だと思って出席しているだけである。

ココルームの活動が「『公共の表現』という答えのない文脈を生み出し」、「地域の『声』の対話を生み出すことで、文化資源の自由なネットワークを作り上げていて、危機的な地域を元気づけ」ているとは、やはり思えない。ココルームが場を持ったことで、数人のおじさんが人生を語り出したが、地域に影響を与えるほどではない。また、「ココルームがあったから、この地域に来た」という外からの声もないわけではないが、その人数の少なさからして、地域の経済活性を支えているとは言い難い。

『社会関与型芸術』に対する不安定なインフラストラクチャーは、一時的な『創造性』の地平を作り出し、たえず都市を新たに現れた企業家らによる再活性化の最先端を作り出すように働きかけている。」(ibid:102)とあるが、ココルームの活動現場において、その場に立ち会った人たちは、あまりに空気を読まない人々の突拍子もない表現に驚き、関心を持つかもしれない。少なくとも筆者は面白いと思っているのだが、これを一時的な『創造性』の地平と書いていいのか、どうか。ノヴァック氏はその場面をご覧になったことはないと思われるので、そのように想像されたのだろうか。またココルームの活動が企業家らに働きかけるような要素は今のところ全くない。

## 2. 現場と研究の乖離

現場での積み重ねが、その時目にした感情によって「研究」の名のもとに、異なる意味を付与されて表記されることがある。例えば、「支援つきの住まいが建てられるという状況は、公的な住居というカテゴリーをつくることにつながり、既存のコミュニティを3つの立場に分けて、人を強制的に移動させることになった。まず一つ目が『仕事をしたいが見つけられない人』そして『医療的な、また福祉的なサポートを必要とする人』、そして『社会に適應できない人』である(原口 2008)。野宿者は最後のカテゴリーに入り、公共空間の私的利用を糾弾され、排除されるようになった」(ibid:106)のくぐりでは、支援者によって釜ヶ崎の人々が分断されていると読み取れる。しかし、多くの野宿者が特別清掃事業(以下、トクソウ)<sup>2)</sup>で働き、生きていこうとする人の姿をして「社会に適應できない人」とすることに違和感を持つ。この事業は地域の労働運動を通して、彼らが労働者として行政から勝ち取った事業である。登録した55歳以上の人々、障害を持つ人々が誇りをもって働いている。「社会に適應できない人」と名づけられることへの抵抗として、この事業を獲得するために、市役所前で野営闘争を行い、行政への働きかけを行ってきた労働者は何百人にも及ぶ。

もし、現場で働く労働者たちがこの文章を目にした時(学術論文の冊子を読む機会はほぼないのだが)、怒りやがっかりした気持ち持つとしても、その気持ちを表すことばを記す機会は、なかなかないのだから。

ノヴァック氏は、「『実行する上で社会的に最も重要なこと』は、都市を特別なアートの地域(フェスティバルゲートのような)に導くことで、それは既存の住民に対して圧力をかけることでもある。」(ibid:101)と記しているが、周辺地域の人々—新世界や釜ヶ崎の地域住民に対して、特別なアートの活動が既存の住民を抑圧したというのは事実ではない。地域住民すべてがアート活動を快く思っていないかもしれないが、フェスティバルゲートのアート団体は地域と協力し、新世界地域で50年途絶えていた盆踊りを復活するなど、地域と話し合い、さまざまな取り組みを工夫していたと思う。

また「フェスティバルゲートのNPOが、コミュニティにおける交流を築こうとしていた時、結局は、この建物は公共空間の私有化を象徴したものになり、カラオケストリートのような寄せ集めの集まりが持つ独特の広がりのある創造性を、固定化してし

まうものであった。」(ibid:108)とするが、ノヴァック氏が描く寄せ集めの集まりとは何であろうか。当時、カラオケストリートのそばで野宿生活をしていた人がカラオケストリートの人たちに向かって「占有しているじゃないか」と苦言を呈している映像<sup>3)</sup>がある。カラオケ屋台側の人たちは「排除するな」と訴えている。カラオケの自由な雰囲気を楽しむ人々がいる一方、覚せい剤売買や売春斡旋が行われるなど、暴力団の資金源になっていることをこの野宿の人も知っていたと思われる。カラオケ屋台にも経営者がいて、雇われる踊り手などもいて、この経済社会のなかで運営されている。カラオケ屋台とフェスティバルゲートのアートNPOの動きとは相関関係はないのだが、ノヴァック氏が相対化し書き記すことによって、フェスティバルゲートのアートNPOたちは世間知らずの能天気か、無邪気なふりをして公共空間を私物化する組織のようにみえてくる。

つづいて、「コクルームの軌跡を見ると、創造性や独立性、そしてフレキシブルで自活的な組織であるということ、新自由主義的な企業家の独立の精神によって形作られていて、こうした新自由主義的な精神は、コクルームが抵抗しようとしているジェントリフィケーションのロジックに由来している。(略)彼らのレジスタンスは、企業家的な議論として『大きな経済論』と共に提示され、それは人的資源を競争力のある『一番の方法』や合理的な取引へと動員し、統合していく。」(ibid:113)という文章と、上述の中村氏の「行政の公的支援のもとで行われる」アートプロジェクトへの批判をあわせて考えると、公的支援によっても、公的支援のない独立的な手法をとっても、前者はジェントリフィケーションに加担し、後者は新自由主義のもと地域の人々に抑圧をあたえることとなり、アートプロジェクトは身動きのとれないものとして見えてくる。

ノヴァック氏の結びのこぼれ「コクルームの失敗からは、たとえ、常にジェントリフィケーションに対する抵抗運動でないとしても、アートが政策的な事業の中に統合されない技を宿していたということが明らかである。」(ibid:114)の意味を捉えるのに、苦労し、2通りの読み方をした。

一つ目、「コクルームの失敗」とは、インタビューのときにわたしが「コクルームは失敗したと思っています」と話したことを思い出して、この文章を読み解いた。しかし、そうすることによって、この論文の意図がまったくわからなくなってしまった。

わたしにとって「コクルームの失敗」とは「コクルームを立ち上げ、社会実験としてやってきたこと

が失敗だった、と認めること」であり、その一番の理由は給料が安かったというもののだが—その失敗を認めただけで、新しい事業に取り組むという覚悟だった。「トライアンドエラー」の延長にあるこの「失敗」に、ジェントリフィケーションは関係なく、公的な資金が入らなかったことにあるかどうかについて結論は見いだせていない。また、そのことがネオリベ的な政策に位置づかないという証左でもないと考えている。

二つ目、コクルームの活動様式はネオリベ(=企業家的)だけど、行政によって期待されている釜ヶ崎の「問題の解決」ができてない。(=失敗)コクルームはジェントリフィケーションに抵抗する運動体でもないが、結果的に「アートが政策的な事業の中に統合されない技を宿」していることが証明できるほど、「カフェのふり」は、「現代の政治の国際的転回を表す」ものなのだろうか。それほど大層なものだと思えない。この結びに至る理由が「必ずしも都市の環境を恒久的に変化させることにあるのではなく、すでにそこに存在する生き生きとしたものの再認識をすることによって新自由主義的な『再活性化』の影響を和らげることにある。」(ibid:113)にあるとしても、ノヴァック氏がそう考えるならば、紙幅はその分析や論考にあてねばなるまい。

### 3. 誤記や誤認の軽々しさと、現場の曖昧さと重さ

ノヴァック氏の文章に散見される人名などの誤記、認識違いに対して、現場にいる者としては、研究者と名乗る人に話をするに不信感を持ってしまふ。せめて確認してくれれば指摘できるのに、と思う。論文というものは引用されていく。これがまた引用されることにより気持ちはいらない。

詳細をみていく。

- コクルームというのは、(中略)詩のワークショップの名前だった。(ibid:96-97)  
→詩を中心とする団体の名前だった。
- ドアの外では、地元の商店が安い野菜や食べ物を買っている(ibid:97)  
→地元の商店ではなく、就労支援として農作業をしている団体が週に一度、コクルームの玄関先で野菜を販売している。
- パフォーマンスグループ「ひびき」(ibid:97)  
→NPO法人ダンスボックスのことか。神戸市新長田で活動を継続している。

- 大阪アーツカウンシル (ibid:106)  
→2000年代に大阪アーツカウンシルは存在しない。2013年から。
- 600ものベッドがある施設が建てられた。(ibid:106)  
→シェルターのことか。
- アートNPOの組織たちは当初20年の契約だったが(ibid:106)  
→10年と聞いていた。
- 2002年、上田さんがフェスティバルゲートでココルームを設立した時(ibid:107)  
→2003年設立。
- 対話を生み出すことを目的にした詩のワークショップであった。(ibid:107)  
→詩のワークショップや舞台でのパフォーマンス、トークイベントなど、数多くの表現の場を作っていた。
- こうした恐怖を和らげる目的で、ココルームのボランティアスタッフたちは、国内外の旅行者に対して特別な釜ヶ崎ツアーを行っている。(ibid:107)  
→恐怖を和らげる目的ではない。はじめた来た人に、飲食店や銭湯などを教えたりすることは特別なことではないだろう。また、この街をただ歩くだけでは、独特な背景をうかがい知るのには難しいことから、興味のある方には、釜ヶ崎ツアーを行っている。
- 「成田や」(ibid:107)  
→「難波屋」
- 井上のぶろう (ibid:108)  
→井上登(いのうえのぼる)
- この壁画は、地元企業から依頼され、大阪市と南海鉄道が出資したものである。(ibid:109)  
→依頼されたものでなく、西成のラッパーが提起したもので、大阪市も南海鉄道も出資していない。
- はまだまい (ibid:110)  
→はらだまい
- 釜芸はシェルターにもスーパークITCHンにもなる学校 (ibid:110)  
→ヨコハマトリエンナーレ2014で二日間の炊き出しを行ったことをさしていると思うが、常時シェルターやスーパークITCHンは行っていない。
- 彼らの日々の服や諸々のものは、大阪大学の「コミュニケーションデザインセンター」の「ラボカフェ」で常時展示されている (ibid:110)

→展示されていない。

- 大阪大学による初めの取り組みは、失業中の男性のクラスで「むすび一座」を組織して紙芝居を練習したことであった。(ibid:110)  
→意味不明。「紙芝居劇むすび」は釜ヶ崎で活動するが、2005年以前は「かまなびごえん」、以降は「紙芝居劇むすび」として、この地域で暮らす男性たち、ホームレスの経験があったり、生活保護での生活をしながら、居場所、つながりづくりとして、オリジナルな紙芝居劇をつくっている。
- 上田さんは釜ヶ崎を代表する人物になっていた。(ibid:111)  
→そんなことはない。
- 彼女はついに、80人を収容できるアパートを寄付を募って建て、管理を行うことになった。(ibid:110)  
→建てていない。アパートの管理を2010年から3年あまり請け負った。

#### 4. ことばは、誰のものか、誰に届くか

初期ココルームの6年あまりは、修論、卒業論文、博士論文などの研究対象になることはほぼなかった。だから、現場からことばを紡ぐ必要を感じ、ブログに綴り、フリーペーパーや報告書などを自前でつくってきた。やがて、論文を書きたいという学生や院生が現れるようになる。彼らからスタッフや釜ヶ崎のおじさんたちにインタビューをしたいと依頼されるようになる。しかし、いきなりインタビューを受ける気持ちはないことを話す。一定期間通い、住み込み、本人がこの人に対し話したいという気持ちになるまで、時間をかけてつきあいをしてほしい、と促す。研究という体をとっているが、人生に関わりあい、影響をあたえあう存在だと思うからだ。

(現場に身をおかず、書かれたことば、資料などを研究する方法もあることは承知しているが、ここでは触れない。)

研究においてのことばは、研究と現場で時間をかけ、ともに過ごし、ともに考え、話し合い、確認し合うことによって、強度を持つのではないか。

ノヴァック氏は、文中でわたしに会っていることを記しているが、英語のできないわたしとは「ハロー」とあいさつ程度である。またインタビューは、翻訳者が録音機を持って一人でやってきて、わたしは話をした。彼に知ってもらいたいと思うような話

を長々した。わたしは原稿は何度かのやりとりを経てから発表されるものとばかり思っていた。これまで研究者とつきあってきて、発表前に確認がない、ということはなかったからだ。

やがて、ノヴァック氏から、何の確認もないまま発表がなされた。

また、論文は英語であるため、わたしには何が書かれてあるのかわからず、英語話者が協力してくれるまで内容がわからなかった。

ことばは誰のものか、と、ことばは誰に届くか、という二つの問いがあるとしたら、これもまた、研究と現場を往還するものだと思う。一方通行ではありえない。ことばは、研究と現場の往還の時間の中で、厚みを帯び、現実を生きていくものになる。

## 5. 現場と研究の、ことばをつなぐために

往々にして、アートに公的資金が投入されることに批判的である人が多い。中村氏の論考もその延長にある。アートの内容が行政の思惑に動いていくこと、行政への忖度がおこること、あるいはアートという個人の趣味を公的資金で行うことはおかしいという考えなどがあげられる。

ココルームはその立ち上げから5年間、行政の公的資金によって支えられ、その後はそこから離れ、市場のなかで活動している。どちらの経験も持ったことが特徴だろう。ノヴァック氏によって、それらの経験が「カフェのふり」に集約されて「国際的転回を表す」という光栄なことばになっている。しかしながら、ココルームの活動が文化的な場所も作れないまま、中途半端なゆえに、政策に統合されない技を宿す先に、何があるのだろうか。

地域のなかでは、さまざまな立場や意見があり、現場は流動的で揺れている。揺れながら動く。そのなかでぎりぎりの選択をして生きている人々、働く人々がいる。理想的にひとつ飛びにうまくいくことなどないなかで、現実を少しでも動かしていこうと汗する人々のことばは、それほど明快ではない。曖昧に、口ごもる現場の現実を、それでも、ことばとして落とし込むときに、ことばをどのように取り扱うのか。現実の刻々と変化する日常の只中にいる人と、ことばを活字に定着させる研究者との間をつなぐ手立ては何だろうか。

ココルームの活動の原点には、いくつかのことばがある。

栗原さんの「自分のなかの他者を動かす」（栗原

2005）ことをアートと捉える考え方。

高祖岩三郎さんの、一言一句は忘れてしまったが「アートが上流社会をむいて仕事するのではなく、社会のなかにある不平等や違和感に対して向かっていく」生き抜く術としてのアートをとらえる考え方。

現場においては、さまざまな関係者がいて、立場や考え方、好みも異なる。今の社会では大きく物をいう「お金」も関わりを持ち、組織の体力や個人の生活に影響を与える。そうした大海原に、漕ぎ出したココルームの羅針盤となるのは、これらのことばだった。

もちろん、日常のなかでいつも出会う、ことばが上手ではない（釜ヶ崎の）人たちのことばもふるまいも大きな励ましであった。彼らのことばには、真実を刀に載せたような鋭い瞬間も持つ。

釜ヶ崎に越してきた2008年に、栗原さん、高祖さんにも現場に足を運んでもらえる機会があった。

栗原さんは釜ヶ崎のおじさんたちの話にうなづきながらずっと耳を傾けていた。そして、シンポジウムやお話を企画し、「ことば」をもらった。栗原さんは、おじさんたちやわたしたちといっしょに視線をあわせてうえて、お茶をしたりご飯を食べたり時間を過ごして、「ことば」を置いていった。その「ことば」とは大海原のもうすこし先に、足がかりとなる小島の位置を教えてくれるようなものだった。それまで、見えなかった景色がすこしくっきり見えてくるような。

高祖さんにはココルームの活動について、具体的な話をするとはなかったが、地域のおじさんや外国の人たちが集っている場を、にこにこご覧になっていたのはよく覚えている。

ココルームにとって18年間、活動の軸となることばは変わらず、悩んで迷えば、栗原さんの本を開き、自分のなかの他者を動かすことを試みた。

活動はお金持ちを向いて仕事をするのではない、けれどお金がないと活動をつづけることはできないので、バランスを保とうとするとき、高祖さんのことばを思い出し、工夫を続けてきた。

現場の者と研究者が「ことば」のやり取りを重ねるためには、現場でともに過ごすことが大切だと思う。時にはフォーマルな研究会などに、現場の者が出向くことも刺激になる。お互いのフィールドを行き来しあい、感じあい、話をして、表現しあって、「ことば」の往還を行い、いっしょに考える。正直にあることが、とても大事だと思っている。

その先に、「ことば」は拓かれる。

## 注

- 1) 1998年に成立した特定非営利活動促進法(以下、NPO法)の第一条には、「この法律は、特定非営利活動を行う団体に法人格を付与すること等により、ボランティア活動をはじめとする市民が行う自由な社会貢献活動としての特定非営利活動の健全な発展を促進し、もって公益の増進に寄与することを目的とする」と定められています。
- 2) 釜ヶ崎の55歳以上の日雇労働者を雇用して、大阪市内及び府下の施設や道路などの除草・清掃や、保育所の遊具のペンキ塗りなどの作業を実施しています。野宿を余儀なくされる高齢労働者に、働いて収入を得られる就労機会の提供を行っています。(釜ヶ崎支援機構のHPより)
- 3) 2004年にココルームで上映された映画。天王寺公園のカラオケ屋台の撤去をめぐるドキュメンタリー。酒井氏たちから持ち込まれたこの映画を上映したことで、筆者は1週間あまり毎日のように大阪市に呼び出され、話し合いを重ねた。

## 参考文献

- 熊倉純子(2014)「まちの課題とアートの幸せな関係」『アートプロジェクト(芸術と共創する社会)』水曜社。
- 栗原彬(2005)『存在の現れ』の政治——水俣病という思想』以文社。
- 栗原彬(2016)「自治：自分のなかの他者を動かす」
- 上田假奈代『釜ヶ崎で表現の場をつくる喫茶店、ココルーム』フィルムアート社, pp.144-162.
- 中村葉子(2014)「なぜアートはカラフルでなければいけないのか——西成特区構想とアートプロジェクト批判」『インパクション』,195号,インパクション出版会, pp.70-76.
- 酒井隆史(2019)「ジェントリフィケーションへの抵抗を解体しようとする者たち〜『大阪・釜ヶ崎、沖縄——政治に揺れる街の声』(岸政彦×白波瀬達也対談)批判』(2019年11月18日公開) <https://note.com/hana3momo3/n/n790e485b401e> (2020年2月4日アクセス)
- David Novak “The Arts of Gentrification: Creativity, Cultural Policy, and Public Space in Kamagasaki”. *City & Society*, 31(1), 2019, pp.94-118. 翻訳は前章で掲載されている。デイビッド・ノヴァック(松井恵麻訳)「ジェントリフィケーションにおけるアート活動——創造性、文化政策、そして釜ヶ崎の公共空間について——」